



永年勤続と旅 白門を誇りに心豊かな人生を

卒業進級の春がやってきた。ご卒業される皆さんにおかれては、白門を誇りに、今後の大いなるご活躍を期待したい。社会という大海に出れば、学生時代がいかにも自由で貴重な時間であったかを感じ入ることだろう。そして学生時代の友が、かけがえのない宝物であることに気づくはずだ。

人生の豊かさは、経済面だけではかることはできない。家族や仕事を生きがいに、趣味を持ち仲間を得て、これからの人生を心豊かに歩んでほしい。

日本の企業の多くは、永年勤続表彰制度を導入している。帰属意識の向上や長期勤続の奨励を目的に、5年や10年の節目ごとに、賞品ないしは賞金で讃える制度である。バブル崩壊後、日本の経営の象徴とされた終身雇用のしくみが崩れ、成果主義や雇用の流動化が進んだ。そのため永年勤続表彰は、いったん廃れたが、2006年ごろをさかいに増加に転じ、今やその実施率は8割にまで回復している(産労総合研究所調べ)。その背景には、せっかく育てた人材が他社に流出してしまうのを、防ぐ狙いもあるようだ。

また、リフレッシュ休暇制度を導入する企業も、回復から増加の傾向にある。リフレッシュ休暇とは、おおむね5日間から2週間程度のまとまった休暇を節目ごとに付与する福利厚生施策で、それにあわせて旅行費用を補助する企業も少なくない。

これら補助や永年勤続表彰に、よく用いられるのが旅行券だ。旅行券支給後、1年以内の使用が確認できれば、所得税扱いとならず非課税対象になる。旅行をしなかった場合は、会社へ返還しな



バンコク郊外ナコーンパトナム県のスワン・ゴルフ&カントリークラブで大学同期の勤続25年を祝った

ればならない等の規定もある。多くの企業人が制度を利用して、職業生活の節目に国内外へと旅に出る。心身ともにリフレッシュして、気持ち新たに仕事にいそしむのである。

今年度は、筆者の同期たちも勤続25年を迎えた。それぞれの勤務先から表彰を受け、休暇を与えられたと聞く。その同期たちが休みをあわせて、昨夏、勤続25年タイ旅行を企画した。ちなみに筆者も、間もなく独立して20周年を迎える。ならばということで、バンコクで合流した。

お互い学部は違えども、サークルやゼミ活動で学生時代から気心の知れた仲間たちだ。海外で起業したもの、大手銀行の管理職、ゼネコン、商社、弁護士と、活躍の舞台は十人十色。途中参加や途中離脱をするものもいて、働き盛りにあることを感じさせる。

男性陣の趣味はゴルフで共通しており、私も一日、ラウンドを一緒した。食事をしながらの会話は、子供の進路や親兄

弟に始まり、職場での悩みや将来のことなど多岐にわたる。だが、いつしか話題は学生時代にさかのぼる。夢多き若かったころの、昔話に花を咲かせるのが、お決まりのパターンだ。そうやって、おのおの明日の活力を得ているのがわかる。

私はシンガポールで仕事をすませてからの途中参加組で、わずか1泊。「次回は、東京で」。そう言って、白門の仲間たちとはバンコクで別れた。

この春、仲間のなかには海外駐在に赴くもの、活躍の舞台を海外から日本へ移すものもいる。そういう筆者も、母校・中央大学で縁をいただき、教壇に立つことになった。人生の節目は、幾度となくやってくる。そうしたときに支えになるのが、学生時代の友であることを忘れてはならないと、肝に銘じている。

略歴 ちば・ちえこ 観光ジャーナリスト。横浜商科大学講師。中央大学経済学部卒。著書に「観光ビジネスの新潮流」(学芸出版社)など多数。